

事例番号:360005

原因分析報告書要約版

産科医療補償制度
原因分析委員会第一部会

1. 事例の概要

1) 妊産婦等に関する情報

経産婦

2) 今回の妊娠経過

妊娠 32 週 6 日 - 切迫早産のため搬送元分娩機関に管理入院

3) 分娩のための入院時の状況

管理入院中

4) 分娩経過

妊娠 33 週 5 日

11:05 出血および子宮収縮持続あり、切迫早産管理のため当該分娩機関に母体搬送

15:00 陣痛発来

18:14 経膈分娩

5) 新生児期の経過

(1) 在胎週数:33 週 5 日

(2) 出生時体重:2000g 台

(3) 臍帯動脈血ガス分析:pH 7.40、BE -1.4mmol/L

(4) Apgar スコア:生後 1 分 6 点、生後 5 分 8 点

(5) 新生児蘇生:人工呼吸(バッグ・マスク)、気管挿管

(6) 診断等:

出生当日 早産児

(7) 頭部画像所見:

生後 22 日 頭部 MRI で脳室周囲白質軟化症の所見

6) 診療体制等に関する情報

<搬送元分娩機関>

- (1) 施設区分: 診療所
- (2) 関わった医療スタッフの数
医師: 産科医 1 名
看護スタッフ: 看護師 2 名

<当該分娩機関>

- (1) 施設区分: 病院
- (2) 関わった医療スタッフの数
医師: 産科 2 名、小児科医 2 名
看護スタッフ: 助産師 4 名

2. 脳性麻痺発症の原因

- (1) 脳性麻痺発症の原因は、出生前後の循環動態の変動による脳の虚血（血流量の減少）が生じたことにより脳室周囲白質軟化症（PVL）を発症したことであると考えるが、その循環動態の変動がいつどのように生じたかを解明することは困難である。
- (2) 早産期の児の脳血管の特徴および大脳白質の脆弱性が PVL 発症の背景因子であると考えられる。

3. 臨床経過に関する医学的評価（2020 年 4 月改定の表現を使用）

1) 妊娠経過

- (1) 妊娠中の管理は一般的である。
- (2) 妊娠 32 週 6 日に不正出血と子宮収縮のため切迫早産と診断し入院管理としたこと、および入院後の管理（子宮収縮抑制薬投与、血液検査実施、ハストレス実施）は、いずれも一般的である。

2) 分娩経過

- (1) 搬送元分娩機関における妊娠 33 週 4 日の入院中の対応（適宜分娩監視装置装着、腹部緊満の増加が認められ子宮収縮抑制薬を増量したこと）は一般的である。

- (2) 妊娠 33 週 5 日、出血および子宮収縮が持続しており、胎児心拍数陣痛図上、一過性徐脈が頻回に認められるため子宮収縮抑制薬を増量したこと、および当該分娩機関に母体搬送したことは、いずれも一般的である。
- (3) 当該分娩機関における妊娠 33 週 5 日、母体搬送後の対応(超音波断層法実施、破水のため感染のリスクを考慮し子宮収縮抑制薬を中止したこと、分娩監視装置装着)、および自然に経過観察としたことは、いずれも一般的である。
- (4) 臍帯動脈血ガス分析を実施したことは一般的である。
- (5) 胎盤病理組織学検査を実施したことは適確である。

3) 新生児経過

新生児蘇生(バッグ・マスクによる人工呼吸)は一般的である。

4. 今後の産科医療の質の向上のために検討すべき事項

1) 搬送元分娩機関および当該分娩機関における診療行為について検討すべき事項

(1) 搬送元分娩機関

なし。

(2) 当該分娩機関

なし。

2) 搬送元分娩機関および当該分娩機関における設備や診療体制について検討すべき事項

(1) 搬送元分娩機関

なし。

(2) 当該分娩機関

なし。

3) わが国における産科医療について検討すべき事項

(1) 学会・職能団体に対して

早産児のPVL発症の病態生理、予防に関して更なる研究の推進が望まれる。

(2) 国・地方自治体に対して

なし。